

シンポジウム 「生態文学」

開催日 : 2010年5月26日(水)
午後2時00分～午後5時00分
会場 : 市川市グリーンスタジオ
主催 : 市川市・日本ペンクラブ

プログラム	
14:00	開会挨拶 市川市長
第一部 映画上映	
14:10	ドキュメンタリー映画「平成熊あらし」(61分)
15:10	(休憩 10分)
第二部 パネルディスカッション	
15:20	パネリスト： リーベイファー 李佩甫 (作家) ファンシオチン 范小青 (作家) シュジャオピン 朱晓平 (作家) キファドン 邱華棟 (作家) 浅田次郎 (作家) 岩崎雅典 (映画監督) 谷村志穂 (作家) 進行：西木正明
16:50	まとめ・閉会挨拶 西木正明 (日本ペンクラブ常務理事)
17:00	終了

出演者プロフィール



李佩甫（リー・ペイフー）

1953年、中国河南省許昌生まれ。文革期に農村で労働、後に工場労働者、文化局勤務、雑誌編集などを担当。1978年から長編小説、短篇小説、ルポルタージュ、テレビ脚本などの作品を多数発表してきた。現在、河南省文学芸術界連合会副主席、河南省作家協会主席。日本語に翻訳されている著作「羊の門」（勉誠出版）



范小青（ファン・シオチン）

1955年生まれの女性作家。子供時代は蘇州で過ごし、15歳のとき父母とともに農村に下放。1974年に高校を卒業して農村生活をした後、1978年江蘇師範学院に入学、1982年卒業後大学で教職についた。1980年から作品を発表。現在、江蘇省作家協会主席、中国作家協会全国委員会委員。日本語に翻訳されている著作「酒話」「楊湾港を船出して」「道を変えたら」「晩景」（蒼蒼社）



朱晓平（シュ・シャオピン）

1952年四川省生まれ。北京中央戯劇学院卒。北京映画制作所でシナリオ制作を担当する一方、小説家として活躍。現在、中国作家協会会員、中国映画芸術家協会会員、中国映画集団芸術創作管理センター会員。日本語に翻訳されている著作「縛られた村」（早稲田大学出版部）



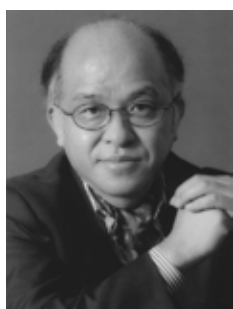
邱華棟（キ・フアドン）

1969年新疆生まれの若手作家。雑誌『青年文学』の執行編集長、北京作家協会理事。16歳から作品を発表。主な著書に長編小説『夏天的禁忌(夏の禁忌)』『夜晚的諾言(夜の約束)』など。他にも中・短編小説、散文、詩歌などを精力的に執筆し、これまでに発表した作品は、合わせて400万字以上に及ぶ。作品の一部は、フランス語、ドイツ語、日本語、韓国語、英語に翻訳され海外でも出版されている。



西木正明（にしき・まさあき）

1940年、秋田県生まれ。早稲田大学中退後、平凡出版で14年余り編集者生活を送り、1980年に独立して作家活動に入る。1980年、デビュー作「オホーツク謀報船」で日本ノンフィクション賞新人賞、1988年「凍れる瞳」で直木賞、1995年「夢幻の山旅」で新田治郎文学賞、など数多くの文学賞を受賞。テレビドラマ、ミュージカル、舞台化された作品も多数。植村直己冒険大賞、大宅壮一ノンフィクション賞、さきがけ文学賞などの文学賞選考委員のほか、日本ペンクラブ常務理事、日本文学振興会評議委員、秋田大学客員教授も務める。



浅田次郎（あさだ・じろう）

1951年、東京生まれ。「地下鉄に乗って」で第16回吉川英治文学新人賞、「鉄道員」で大117回直木賞、「壬生義士伝」で第13回柴田錬三郎賞を、「お腹召しませ」で第1回中央公論文芸賞・第10回司馬遼太郎賞を、「中原の虹」で第42回吉川英治文学賞を受賞。壮大なスケールで描く「蒼穹の昴」、琴線揺さぶる短編集「霞町物語」等、多彩な作風で多くの読者を魅了しつづけている。近著に「ハッピー・リタイアメント」他多数。日本ペンクラブ専務理事。



岩崎雅典（いわさき・まさのり）

1940年、秋田県生まれ。早稲田大学教育学部社会科学科卒業。1970年以降、北斗映画、岩波映画製作所などで主に野生動物の記録映画やテレビ番組の演出にかかわり、1981年群像舎設立、代表に。伝統文化や習俗に迫った「最後の丸木舟」「又鬼」から、「ニホンザル物語、家族」「イヌワシ、風の砦」「クロウサギの島」（第51回毎日映画コンクール記録文化映画賞）など、人間、動物、自然の様々な姿を長期にわたり取材し、記録映画として発表。また、「野生の王国」、「生きもの地球紀行」「素敵な宇宙船地球号」などの人気テレビ番組の企画制作に参加している。



谷村志穂（たにむら・しほ）

1962年北海道札幌市生まれ。北海道大学を卒業。出版社勤務を経て、執筆活動に入る。1990年ノンフィクション『結婚しないかもしれない症候群』が、ベストセラーとなる。同年、処女小説『アクアリウムの鯨』を発表、以後の長編作品には『眠らない瞳』『アイ・アム・ア・ウーマン』など。2002年には『海猫』で第十回島清恋愛文学賞受賞、森田芳光監督により、映画化もされる。他に『黒髪』、『余命』（生野慈朗監督により映画化）などの作品がある。

シンポジウム「生態文学」と市川の文学

【開催趣旨】

今回のシンポジウムの開催趣旨について、日本ペンクラブの資料に基づいて確認しておこう。

* * *

近年急激な発展を遂げている中国では他の先進国同様に公害、そして環境破壊が大きな問題となりつつある。開発が進み、森や草原や沼地などが無くなった結果、そこに生息していた生き物たちは行き場を失い、数を減らしている例も少なくない。

また、地球温暖化により動植物の生態系に異常が起こり、数多くの種が絶滅に瀕していることは、国境にとらわれることなく全世界の人々が危惧していることと言えよう。

こういった声なきものの声を取り上げることも文学の役割ではないかと考え、日本ペンクラブでは今回、中国から4名の作家を迎え、日本の作家と共に「生態文学」をテーマにシンポジウムを開催する。（「生態文学」とは野生動物を題材にかかれた文学作品）

日本と中国という異なる文化においても自然保護の必然性や、「生態文学」にしばしば描かれる動物の親子の絆がいかにかつ大切なものであるかなど、分かち合える意見もあるであろう。反対に、お互いが思いもよらなかった見方を提示することもできるかもしれない。活発な討議が期待される。

【星野道夫】

こうした「生態文学」のテーマを聞いたとき、市川の文学として真っ先に思い浮かべるのは、写真家・星野道夫（ほしのみちお・1952 - 1996）の作品だろう。星野は、アラスカの自然の魅力を、『旅をする木』（1995年・平成7）、『森と氷河と鯨』（1996年・平成8）、『クマよ』（2000年・平成12）など多くの著作で、写真と文章を通じて描いている。それらは、単に自然を憧憬するだけでなく、自然とともに生きる人間の生活と、そうした生活を文明の中で暮らす日本人が知ることの意義にまで及んだメッセージ性を持った作品であるといえよう。

【水木洋子】

今年生誕100年を迎える脚本家・水木洋子（みずきようこ・1910 - 2003）は、人事を得意とする作家だが、放送劇として書かれた「はげやまちゃんちき」（1959年・昭和34）は、キツネとカワウソの動物世界の葛藤を描く日本の昔話を素材に、狐の親子の絆や、自然と人間との関わりなど、水木らしい脚色の加えられた作品である。1975年（昭和50）には、團伊玖磨（だんいくま）作曲でオペラ「ちゃんちき」となり、2002年（平成14）に市川在住のソプラノ歌手・崔岩光（サイ・イエングアン Sai Yanguang）らによって、中国公演も行われた。

【国松俊英・梶山俊夫】

児童文学作家の国松俊英（くにまつとしひで・1940 - ）は、野鳥と自然、人間の生き方を題材にしたノンフィクションを多く手がけ、谷津干潟を題材にした『わたり鳥のくる干潟』（1985年・昭和60）星野道夫を題材にした『星野道夫物語』（2003年・平成15）などがある。

絵本画家としても活躍する梶山俊夫（かじやまとしお・1935 - ）は、「鳥獣人物戯画絵」を元に大胆なアレンジを施したデビュー絵本『かえるのごほうび』（1967年・昭和42）を始め、『なまずのおやま』（1992年・平成4）、『きつねとかわうそ』（2000年・平成12）などで、独自の動物たちを描いている。

【井上ひさし】

都市化した現代の市川にあって、野生動物を描く営みは容易なことではない。今年の4月に亡くなった元日本ペンクラブ会長の井上ひさし（いのうえひさし・1934 - 2010）は、夏目漱石『吾輩は猫である』の犬版ともいえる『ドン松五郎の生活』（1975年・昭和50）で、人語を解する犬を主人公に人間との関わりを風刺的に描くことにより、動物を描きつつ人間を描くという文学世界の構築に成功している。

【杉山忠夫】

このほか、映像ディレクターの杉山忠夫（すぎやまただお・1940 - ）は、牛山純一とともに日本映像記録センターを設立し、世界諸民族の生活文化や野生動物との関わりを映像として記録している。

解題 / 根岸英之（市川市文学プラザ司書）